

(学会動向)

## アジア会計学会

佐藤倫正

### 1. はじめに

アジア会計学会 (Asian Academic Accounting Association: AAAA) の第3回年次大会が、2002年10月26日から29日にかけて、名古屋で開催された。AAAAは、2000年8月にシンガポールで設立大会がもたれ、2001年9月にマレーシアで第2回大会が開催されたばかりの新生の国際学会である。第3回で、ようやく日本の出番となった。

AAAAは、アメリカ会計学会とヨーロッパ会計学会の空白を埋める目的で形成された、アジアに縁のある会計学研究者の国際ネットワークである。会計学に関心のある実務家も含まれる。アジアに縁があるというのは、アジア諸国の大学などに籍がある者の他に、出身国がアジアで、アメリカやヨーロッパの大学で教育を受けたあと、その国でそのまま職を得ている者も含むし、アジア人でなくてもアジアの会計に関心があれば参加できるという意味である。

これまで、日本が参加していた会計の国際学会としては、国際会計教育研究会議 (IAAER) とアジア太平洋国際会計研究会議 (Asian Pacific Conference on International Accounting Issues) があるが、これらはやはり欧米の影響が強い傾向にある。しかし、AAAAは、その名のとおりアジア中心で、欧米抜きでもやっていこうという気概をもっ

て設立された。

AAAAの会則草案の第2条は、AAAAの目的を次のように述べている。

「本学会の目的は、会計教育と会計研究そしてそれらが実務に及ぼす影響について専門的な関心を持つ者に対して、広く意見交換の場を提供することである。本学会は、アジアおよびその他の地域に居住する会員間の相互理解と相互協力の促進に貢献するであろう。また、本学会は、会計教育と研究に関する知見をよりよく広める枠組みを提供して、他の会計学会や職業団体と相互にかかわる事項について問題解決にあたる。本学会はまた、会計教育と研究と実務にかかわる事柄に関する会員の関心や見解について情報提供をおこなう。」

この草案の文章は、ウェブで公開して会員の意見を求めて修正したうえで来年までには確定することになっている。

### 2. 名古屋大会の概要

名古屋大会の開催日程と主要プログラムは以下のとおりであった。

26日：役員会と前夜祭

27日：〈開会式〉

開会宣言 (佐藤倫正, 名古屋大学)

歓迎挨拶 (小野川和延, 国連地域開発センター)

祝辞 (G. Mueller, ワシントン大学  
名誉教授)

会長挨拶 (M. Hanefah, ウタラ・マ  
レーシア大学)

基調講演 (S. Saudagaran オクラホ  
マ州立大学)

〈シンポジウム(1)：原価企画〉

**Moderator: Hiroshi Okano** (Osaka  
City University)

**Tami L. Capperault**

(Boeing Commercial Airplanes, Consor-  
tium for Advance Manufacturing Inter-  
national)

“Target Costing in the United  
States-A Value Creation Journey”

**Philippe Lorino** (ESSEC Business  
School)

“Target Costing in Europe and  
Japan: Comparative Analysis of  
Management Tools and Practices”

**Takuo Sasaki** (Toyota Motor Corpo-  
ration)

“Cost Planning at Toyota: His-  
tory and Present State of the  
Arts”

〈シンポジウム(2)：アジアの会計実務〉

**Moderator: Shahrokh M. Saudagar-  
an** (Oklahoma State University)

**Thomas Wong** (Hong Kong Financial  
Services Institute)

“Accounting Practice in Hong  
Kong”

**Songdej Praditsmanont** (Ernst &  
Young Bangkok)

“Accounting Practice in Asia”

**Junichi Akiyama** (Tama University)

“Accounting Practice in Japan”

〈自由論題報告〉

〈懇親会〉

28 日：〈シンポジウム(3)：環境会計〉

**Moderator: Katsuhiko Kokubu**  
(Kobe University)

**Roger Burritt** (The Australian  
National University)

“Australian Environmental  
Accounting: The View from  
Down Under”

**Jee In Jang** (Chung-Ang University)

“Environmental Accounting in  
Korea: Current Status and Future  
Development”

**Chika Saka** (Kwansei Gakuin Univer-  
sity)

“Environmental Accounting in  
Japan: Trends and Current Prac-  
tices of Environmental Accounting  
Disclosure and Environmental  
Management Accounting”

〈自由論題報告〉

〈会員総会〉

29 日：トヨタ工場見学ツアー

その概要は以下のとおりである。

26 日の前夜祭から、参加者の出足は好調で、会場となった金山 (かなやま) のサイプレスガーデン・ホテルの 3 階は海外からの参加者を中心に 100 人ほどが集い閉会まで賑わった。

27 日と 28 日は、白鳥 (しらとり) にある名古屋国際会議場に会場を移し、200 人を超える参加者を迎えた。27 日夕方の懇親会では、アトラクションとして、西川流の藤娘と、大

竹和美氏(キタン会)のマジックが披露され、海外からの参加者の目を楽しませてくれた。

シンポジウムでは、「原価企画」、「アジアの会計実務」、「環境会計」というテーマごとに、それぞれ選び抜かれた3人の報告がなされ、各領域の近年の発展を確認しあった。「原価企画」と「環境会計」は日本が海外に誇れる研究領域である。この点については、野口晃弘稿「学会動向：アジア会計学会と日本の会計」『経済科学』第49巻第4号(2002年3月)を参照されたい。「アジアの会計実務」は、アジア各国が会計ビッグバンにどのように対応しているかを確認しあうために設定された。

さらに26のジャンルに分けられた86の自由論題報告がなされ、それらをめぐって活発な議論がなされた。シンポジウムの9つの報告の要旨の日本語版と86の自由論題報告の報告者とテーマについては、名古屋大学大学院経済学研究科のホームページにある学会紹介の「アジア会計学会」のウェブに掲載しているのをご覧いただければ幸いである。

<http://www.soec.nagoya-u.ac.jp/html/gakkai/asiakaikei/index.html>

そして、29日のトヨタ自動車の工場見学ツアーには100人ほどがバス2台に分乗して参加し、トヨタが特別に質疑応答の場を設定してくれたこともあって、一行は充実した秋の一日を楽しんだ。

名古屋大会に会費を払い込んだ参加登録は、日本(120)、マレーシア(19)、アメリカ(15)、韓国(12)、オーストラリア(9)、台湾(5)、タイ(5)、ニュージーランド(4)、カナダ(3)、イギリス(3)、フィリピン(3)、香港(2)、サウジアラビア(2)、ブルネイ(2)、中国(1)、フランス(1)、シンガポール(1)、

の18カ国207名に及んだ。このうち14名が欠席された。ネパールとスリランカから熱心な参加希望があり、受け入れ努力をしたが、時間的制約と郵便事情や入国条件から実現に至らなかった。この他に、招待者として66名の参加をいただいた。これまでにない大きく賑やかな大会であった。

名古屋大会の開催に当たっては、日本会計研究学会および国際会計研究学会が協力体制を敷いてくださった。また、国際会計研究学会第19回全国大会がAAAA名古屋大会の2ヶ月前に中部大学で開催されたが、その準備委員会からは、様々な形で名古屋大会との繋がりをつけていただき、名古屋大会の円滑な運営を支援していただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる。

さらに、トヨタ自動車およびトヨタグループ各社、中部電力、東邦ガス、新東工業、大竹製作所、トムソンラーニング、名古屋海外書店、公認会計士協会東海会、4大監査法人、朝日大学、名古屋大学経済学部同窓会(キタン会)、名古屋大学会計学研究会など、多くの企業、法人、団体から心温まるご支援をいただいた。その詳細は上記ウェブに掲載させていただく。名古屋大会の準備委員会一同、改めて厚くお礼申し上げる次第である。

### 3. 名古屋大会までの経緯

ここで、名古屋大会に至るまでの経緯を簡単に振り返っておこう。

AAAAの設立準備の最初の集会在、1998年6月17日に香港であった。この時の議事進行をしたのが、アメリカ会計学会の国際会計部門の当時の会長であったS. ソーダガラン教授(サンタ・クララ大学、後にオクラホマ

州立大学)で、アメリカからは他に、G. ミューラー教授(FASB)と、F. チョイ教授(ニューヨーク大学)も出席していた。アジア諸国からは、バーレーン、香港、日本、パキスタン、シンガポール、台湾、韓国の代表が出席した。日本からは鎌田信夫教授と私が出席した。

そこで、第1回を2000年に開催することは、世紀の変わり目であることから簡単に合意された。次いで最初の開催国に議題が移ると、長い沈黙が訪れた。私の隣の席に座っていたミューラー教授が、「日本はどうか」と小声で水を向けてくれた。そのことを、さらに隣の鎌田教授に伝えたが、日本の名前が出たことは光栄なことではあったが、かなり急な話でもあり、もちろんその場で即答できるはずはなく、結論のでないまま会合を終えた。

第2回の会合が同じ年の10月にマウイ島でもたれたが、この時、第1回はシンガポールが引き受けることに決まった。そして1999年の11月に、メルボルンで第3回の会合がもたれたが、そこで第2回はマレーシアで開催されることが決まった。日本は経済的にはアジアの中心国だが、地理的にはアジアの東端に位置する。英語の問題もある。そのうえ、日本の会計学会は、これまで欧米への対応で手一杯であった。新生学会のホストになれる体勢づくりには、しばらく時間が必要であった。

記念すべきAAAAの設立大会が2000年8月27日と28日、シンガポールのホテル・パンパシフィックで開かれた。フタを開けてみれば、参加国は21カ国、参加者は150人を超え、72の自由論題報告がなされる盛会であった。国別の参加者は、第1位が開催国のシンガポールで41人、第2位は日本の33人。第3位はオーストラリアの20人であった。掲

げられたテーマは「開示と企業統治と透明性：アジアにおける金融市場向け開示に対する挑戦」で、4人の報告があった。日本を席卷している会計ビッグバンが、アジア全体の関心事であることをうかがわせた。

この時の役員会で第3回の開催国が議論された。名古屋大学からは牧戸孝郎教授を筆頭に5人が意を決してシンガポールに乗り込んでいたので、サウジアラビアが立候補していたが、日本も名古屋を第3回の開催地として立候補した。その年の11月、日本の申し出が承認された。これでアジアの中の日本の立場は守られることになった。

AAAAについては、「記憶に残る」第2回大会については是非とも言及しておかねばなるまい。第2回大会は、ウタラ・マレーシア大学の主催で2001年9月16日から19日にかけて、ペナン島で開催されたが、その矢先の11日、アメリカが衝撃的な同時多発テロに見まわれた。そのため、アメリカからの参加予定者は出国できなかった。タイからの参加予定者は大事をとって全員がキャンセルした。日本からの参加は前回を下回ったが、当時の衝撃を思えばいたしかたなかったろう。

そのような緊迫した雰囲気の中で開催された第2回大会だったが、大会は、開始に先立って被災者への黙禱をささげたあと、参加者が協力して欠席者の報告をカバーしながら淡々と進められた。IAS(国際会計基準)をアジア諸国に根づかせることの是非などをめぐって、活発な議論がなされ、最終日の総会で、主催校のウタラ大学の労をねぎらい、来年の名古屋での再会を約束して閉会した。

第2回大会は、新生の学会が抱えることとなる課題を早々に覚悟させてくれたという点で記憶に残る大会であった。アジア会計学会

であるから、東は日本、西はトルコやイスラエルまでをカバーする。アフガニスタンもイラクもアジアにある。これから毎年アジア各国を巡って開催されていくので、アジア情勢の安定が特に望まれるところである。

#### 4. 今後の課題と展望

設立されてまだ3年を経過しただけのAAAAは、国際学会としての形を整えるまでに、いくつかの課題をかかえている。

第1に、これから年次大会を開催する国を決めていかなければならないが、多くの会員が参加できる安全で魅力的な国が漸次選ばれてゆかねばならない。サウジアラビアの場合は、入国手続きに相当の時間がかかることが懸念され、また入国後の女性の行動が制約されうることなどが懸念されて見送られて、韓国（第4回）とタイ（第5回）が優先されることになった。これからはアジア諸国の国別の事情について更に理解を深めていく必要がある。そうすると、AAAAの開催候補地は、ヨーロッパ会計学会やアメリカ会計学会は比べようもないほど多くなる可能性を秘めている。

第2としては、事務局の所在地確定の問題がある。設立から第2回大会まで、事務局はシンガポールにあったが、第3回大会からマレーシアに移った。しばらくはウタラ大学が事務局になるが、今後どのような方針で選んでいくのか、明確な方針は出ていない。運営

コストと、資金力と英語と地理的位置などが係わってくるであろう。

第3は、ジャーナルの発行である。電子ジャーナルか冊子か、名称、出版国などを決めていかなければならない。ここまできるとAAAAが名実ともに成立を見たことになる。

今、アジアが活気づき始め、世界の目はアジアに注がれている。日本の会計学がアジアを視野に入れることになれば、英米型グローバル会計とアジア的な会計との比較を通して、日本の会計が立体的にとらえ直されるようになるだろう。

アジアの国々の文化は多様で、宗教も、神道、仏教、儒教、ヒンドゥー教、イスラム教、ユダヤ教など実に多彩である。その多様な文化のアジア諸国に、グローバル・スタンダードと称される直接金融のネットワークが形成されようとしている。そこで導入される新しい会計は、ビジネスの勝敗を決める判定基準の役割を果たすことが期待されるようになるのだが、現在の日本を見ればわかる通り、新しい会計ルールを採用が一国の経済にきわめて重大な、場合によっては屋台骨を揺がすような影響を与えかねないのである。

アジアの国々に英米型のグローバル会計がどのように根づくのか、固有の文化をもつ各国がどのような反応をするのか、興味は尽きない。ここに会計の豊穡な研究領域が広がっているように思われる。

(名古屋大学大学院経済学研究科)